

# 図書館資料展示

## ＜山本作兵衛炭坑画集『王国と闇』

### 2011年「世界記録遺産」登録＞

「世界記録遺産」(Memory of the World)は、1992年にユネスコ主催で始められた事業で、人類の文化遺産として後世に残すべき書物や文書や記録を指定し保全するためのプログラムです。これまで、グーテンベルク聖書やベートーベンの自筆譜、アンネの日記など140点以上が指定されています。

2011年5月に日本では初めて、明治から昭和にかけての炭坑の生活を描いた『山本作兵衛コレクション』(田川市が所有・保管する絵画585点、日記、雑記帳や原稿と、



山本家が所有し福岡県立大が保管する絵画、日記、原稿など、計697点)が指定を受けました。

山本作兵衛氏は、明治25年(1892)筑豊炭田の中心地嘉穂郡に生まれ、父親は船頭でしたが鉄道の敷設によって失業して炭坑夫となり、作兵衛氏も7、8歳の頃から父母に伴われて坑内に入り炭車押しなどの労働に従事しました。小学校卒業後も炭坑夫として生計を立て、苛酷な炭鉱労働を続けながら家族を養いました。作兵衛氏は幼い頃から絵を描くことが無性に好きで、また深夜独学で勉強して炭鉱の生活記録を深夜に大学ノートに記録し、戦後、炭鉱が次々と閉山した後は夜間宿直員となり、戦死した息子の子ども達のためにヤマの記録を残そうと思い立ち、60歳を過ぎてから数十年ぶりの絵筆を握って、克明で類まれな記録絵画の創作を始め、1000点以上の作品を残しました。1963年には山本作兵衛氏の絵の素晴らしさが世に認められることとなり、『明治大正炭坑絵巻』として出版されました。その後も作品は福岡県の指定有形民俗文化財に指定され各地で絵画展が開催されるなど、誠実温厚な人柄でも惜しまれながら昭和59年に92歳で逝去されました。

立教大学図書館に所蔵されている山本作兵衛氏の著書のひとつ『王国と闇』(1981)は、炭坑労働者の生活を描いた大型複製画集です。筑豊炭鉱を記録した写真集などとともに展示いたします。

立教大学図書館

#### ＜展示・参考資料＞

1. 『王国と闇：山本作兵衛炭坑画集 / 菊畑茂久馬解説』福岡：葦書房 1981
2. 『炭鉱(ヤマ)に生きる：地の底の人生記録』山本作兵衛著 新装版 講談社 2011(1967)
3. 『まっくら：女坑夫からの聞き書き』森崎和江著 山本作兵衛 現代思潮社 1970
4. 『筑豊炭坑絵巻』画文：山本作兵衛 福岡：葦書房 1973
5. 『筑豊のこどもたち』土門拳著 築地書館 1977
6. 『写真万葉録・筑豊』全10巻 上野英信 趙根在監修 福岡：葦書房 1984
7. 『山本作兵衛追悼録：オロシ底から吹いてくる風は』福岡：葦書房 1985

## 「地底からの遺言」 上野英信（『山本作兵衛追悼録』 1985 より抜粋）

その昔、佐賀県の唐津地方をはじめ、九州各地の炭鉱でうたわれていた坑内唄の中に、次のような一節がある。

唐津下罪人のスラ曳く姿

江戸の絵かきもかきゃきらぬ

下罪人（ゲザイニ）というのは、抗夫の蔑称である。スラというのは、石炭を搬出する為の、底部が櫛状になった箱である。それに綱をつけて人間が肩に掛け、ちょうど牛馬が荷を曳くように四つん這いになって曳き出す。種々雑多な坑内労働のなかでも、とりわけ危険で苛酷な重労働の一つであった。しかもこの奴隷的な苦役に従事したのは、後山（アヤマ）と呼ばれる女抗夫たちであった。

「自分をオナゴと思うたら、それこそ一日も勤まる仕事ではなかった」と彼女たちは主張する。「あたま、坑内にさがると気が狂いよった」と語る老婆もあった。彼女たちがみずから「オナゴ」を棄てて地下数千尺の暗黒の坑道にもぐり、短い腰巻一枚の裸身を地熱にこがしながら、狂気となって「スラ曳く姿」こそは、まさしく、わが国の労働者階級が長らくとじこめられてきた、非人間的な状況そのものであったといえよう。……



## 「鉱夫の歴史を伝える画文集」 金子光晴

（『山本作兵衛追悼録』 1985 より抜粋）

大正のはじめの頃のこと、半歳ほど、群馬福島の境の鉱山で飯場生活をしたことのある僕は、ヤマというだけでこの本にこころひかれた。枕の下に三十本のダイナマイトを、盗まれないように敷いて寝ていた。炭山ではない。金銀銅から、欧州大戦争で輸出用に値上りしてきたマンガンに手とりばやくのりかえたものだった。それに、鉱夫たちも、飯塚というわかり者の一等鉱夫たちと他二三人だけが本職で、あとは、百姓鉱夫だった。だが、カンテラを提げて、坑道を下りてゆく生活には、共通したものがある。

著者の山本さんは、明治二十五年生まれというから、ことしで七十五歳ぐらいになる。父親の代からの炭鉱掘りで、生まれる時から石炭の鉱屑のなかにまみれて生きてきたような人だった。鉱山側も、鉱夫側も、じつに有為転変のはげしい幾十年であった。こちらの山、あちらの山と、最低限の暮らしを確保しようとして妻子をつれて流転するくらしは、ボードレールの「カインとアベル」のうらぶれたカインの姿のように、凄愴でさえある。……

